

サーフィン
世界選手権

ワールドゲームズ

9/7 きょう開幕 宮崎市木崎浜

サーフィンの世界選手権「ワールドゲームズ」はきょう、宮崎市の木崎浜で開幕した。6日は県庁で、主催の国際サーフィン連盟（ISA）関係者や河野知事、出場選手が記者会見。ISAのフェルナンド・アギーレ会長は「世界中から東京

五輪の金メダルを目指す、海の親善大使がやってきた」とあいさつした。正式競技として初採用される2020年東京五輪の各大陸予選を兼ねた世界最大級の大会。55カ国・地域から各国男女最大3人ずつの約240選手が出場する。

日本サーフィン連盟の酒井厚志理事長は「過去最大のサーフィンコンテスト。東京で初の五輪メダリストが誕生する。その前哨戦、そして、出場権を懸けた大会。サーフィンの魅力、文化をいろんな人に知ってほしい」と述べた。

サーフィンの世界を背負う選手が出てきてくれる」と歓迎した。会見には、男子世界ランキング1位のフェリペ・トレド選手（ブラジル）、同4位のガブリエル・メディナ選手（同）、女子世界5位のキャロライン・マークス選手（アメリカ）、同23位のビアンカ・ビテンタック選手（南アフリカ）、女子日本代表の脇田紗良選手（神奈川県出身）が出席した。

数日前に宮崎入りした各選手は好印象を語り、トレド選手は「五輪史上初の金メダルには、大変な意味がある。ISAの金メダルと、五輪出場権に集中し一瞬一瞬を真摯（しんし）に戦う」と抱負。脇田選手は「尊敬する選手たちの横に座れるのはうれしい。目標は金メダルで不可能だとは思っていない。できる精いっぱいのことをやって、金メダルを」と誓っていた。

大会はきょう開幕し、11日まで女子、15日まで男子の競技が行われる。競泳の松田丈志さん（延岡市出身）が大会アンバサダーを務める。



前日会見に臨んだ選手たち（6日、県庁講堂）